

改善計画書

施設名 老人保健施設さくらんぼ (担当者 久野亜希子) (作成年月日 平成 19 年 3 月 31 日作成)

(施設として特に優れている点) やり続けること	1	「本当に帰れてよかった」という実感をもって家庭に帰っていただけるよう在宅の受け入れ態勢の個人差や家庭環境に配慮した支援ができる。在宅での生活を円滑に始めることができるよう、相談員、介護職員、理学療法士が本人と一緒に環境の整備のため家庭を訪問し、環境を整えるための援助ができる。						
	2	環境整備のための予算（ユニット費）があらかじめ割り当てられ、ユニットの裁量で柔軟に活用ことができ、利用者の声をききながら、ユニット単位で環境を整備することができる。また、お菓子やコーヒーなど嗜好品についても、その予算から利用者の好みに合わせたものをスタッフが準備し提供することができる。						
	3	施設長である医師が回診のみならず、常に施設内をまわり利用者と直接会話をすることを心がけ、利用者の安心につながっている。						
	4	医療機関からの退院後の再入所について、可能な限り円滑に再入所できるよう医療機関と相談員が調整をはかり、ご家族の不安を軽減している。						
	5	職員の企画運営で交流の機会を設け、職種・部署間の垣根を超えた交流がはかれているため、定着率が高い。						
		課題・改善点	達成目標	期間	開始時期	達成時期	改善スケジュール（人・予算・情報・手順等）	担当
すぐできること	1	介助が必要な利用者が食事前早くテーブルについており、長く待たされることがある。	食事を楽しんでいただける環境を整える。	3ヶ月	平成19年4月	平成19年6月	おひとりおひとりの希望を再度確認し誘導のタイミングを見直す。テーブルについてから、献立についての会話ができるよう情報を提供する。	介護支援専門員、管理栄養士、介護職員
	2	希望通りの回数の入浴をすることができづらい。	個浴の活用により、希望される方の入浴回数をさらに増やす取組みをおこなう。	6ヶ月	平成19年4月	平成19年9月	おひとりおひとりの希望を再度確認し入浴のプランを実施する。	介護支援専門員、介護職員
	3	利用者の中に職員とあまり話す機会がないという方がある。	利用者とはゆっくりかわる時間を増やす。	6ヶ月	平成19年4月	平成19年9月	事務的な作業の見直し（記録の簡素化等）をはかる。	介護支援専門員、看護師長
工夫すればできること	1	認知症の方の自尊心を傷つけるような指示的な言葉遣いになっている職員が一部にある。	全ての職員が認知症を正しく理解し、安心して過ごしていただける対応ができるようになる。	12ヶ月	平成19年4月	平成20年3月	認知症についての研修の機会をもつとともに、生涯学習委員会を設置し「高齢者にふさわしいかわり方とはなにか」を考え、委員が中心となり職員へ指導していく。	看護師長、生涯学習委員会
	2	理念の共有意識に職員間でばらつきがある。	理念に基づいたケアを全ての職員が提供できるようになる。	12ヶ月	平成19年4月	平成20年3月	管理職・エトリダーを交えての職員面談の機会をもち、業務遂行上の不安のフォローや改善の場とする。	看護師長、事務部長、エトリダー
予算化しないといけないこと	1	地域住民との交流の機会が少ない。	地域の方が気軽に施設を訪問していただける環境を整える。	12ヶ月	平成19年4月	平成20年3月	認知症や介護保険制度についての講座を企画し、地域住民に参加していただける機会をもち、まずは施設に足を運んでいただくきっかけをつくる。	コミュニケーション委員会
	2	介護・看護職員がご家族とかかわる機会が少ない。	現場の職員とご家族が意見交換をできる場を、半期に一度もつ。	12ヶ月	平成19年4月	平成20年3月	ユニット単位での家族会を半期に一度企画し、職員とご家族が自由に意見交換できる場をもつ。また、ご家族へサービスに関するアンケートを年1回実施し、結果および要望への対応を施設内に掲示し公表する。	施設長、介護支援専門員、エトリダー